２月セミナーを２月１７日(土)　１３：３０～１５：３０に開催しました。

会　場　　愛知文教大学　２０１教室

テーマ　「～授業のための社会的構成主義～　－　なぜ私たちは一斉授業から抜け出せないのか？ －」

講　師　学び合う学び研究所シニアフェロー副島　孝先生

教員が一斉授業からなかなか抜け出せない理由は、「生徒がグループ協議をすることができるほどの学力が備わっていないケースが多いから」だと私は思います。また、無気力や無関心、親や教員が敷いたレールの上を歩く生徒が多すぎることも原因の１つとして挙げられるでしょう。 昔は知識注入型の授業でも特に問題なかったかのように思いますが、今では主体的に学ぶ姿勢や学びに向かう姿勢を評価する教育体制になってから、「それらをどのように数値化して評価をするべきか」が私たち教員にとって非常にわかりにくいことから、既存の授業スタイル(一斉授業が残ってしまっているスタイル)になってしまっていることも考えられます。 歴史を振り替えると、アメリカが持ち込んだ授業スタイルを長年、日本が執着しすぎた上、時代と世界の教育に遅れをとってしまった結果が、今日における各々の授業スタイルの実態に結び付いていると考えました。
今日の講座で学んだ中で重要だと思ったことは、気づくと一斉授業に陥っていることが多いのはなぜだろう？ということです。 「気づくと一斉授業に陥っていることが多いのはなぜだろう？」これは、自分自身も良く感じることです。「学び合い」ということを意識して授業デザインしているにもかかわらず、授業が進むにつれ、一斉型に戻っている授業をよく目にします。どうしたら、根本から変化させることができるのか？ 本日の副島先生のお話を聴きながら、いろいろ考えることができました。 社会的構成主義の「知識観」にある『従来の学習における「知識」』『「深い学び」における「知識」』の部分で少し感じるところがありました。教師が、「知識」のパッケージを伝えるという型がどうしても強くなっていくように感じました。 子どもが作る授業を実践するためには、教師側はかなり多くの資料・情報・知識・準備が必要になるように思います。この点も一斉型になりがちなところかもしれないと思いました。 いろいろ考えることのできた講義でした。ありがとうございました。
今日の講座で学んだ中で重要だと思ったことは、知識観の転換です。 自分は数学なので、社会的構成主義で他者の意見に触れることで理解を深めていくよりも、正しい論理構成を理解させることに重要性を感じている。数学での学び合いは教え合いになりがちだが、論理の理解や解法への疑問について探索的会話を行わせるとよいとヒントを得た。個別最適な学びは、問題が解けなかったり間違えたりした原因を確認させるように誘導したり、できるようになったら一段難しい問題を与えたりすることや、(代数や幾何などの) それぞれが興味深い分野を深めさせること、と解釈していたが、興味に基づく個別最適と捉えると、インターネットで履歴に基づいて偏ったレコメンドが来ることに近くなるというのは、自分が持っていない発想だった。

今日の講座で学んだ中で重要だと思ったことは、過去の資料を読み返す、問い直すということです。

副島先生ありがとうございました。

１０数年前に、副島先生が投稿された、教職センター通信「社会的構成主義という学習理論」に衝撃を受けました。そのときから、社会的構成主義の学習観と構造主義の言語観の探究が始まったように思います。

内田樹さん、鷲田清一さんたちの本をたくさん読む中で、ちょっとわかった感じがしていました。しかし、セミナーで学ぶ中でまだまだ十分には理解していないことがよくわかりました。

資料や本を読み返し、自分のもちあわせの言葉で語れるように、聴き手のわからなさに寄り添い伝えられるようにしていきたいと思います。ありがとうございました。また、学ばせてください。

今日の講座で学んだ中で重要だと思ったことは、知識観の転換の難しさです。

副島先生が影響を受けた３つの実践についてお聞きしておりまして、斎藤喜博、板倉聖宣、有田和正の３名の先生には、子どもたち同士が他者の考えに触れ自分の考えを構成している様子が理解できました。これは、時代的背景ではなく、授業者の哲学から生まれるものだと感じました。

「なぜ私たちは一斉授業から抜け出せないのか？」という副島先生からの問い正対してみて、まず考えたのは、自身が受けてきた授業観（正解としての知識観）にとらわれている自分があります。同時に、東大を頂点とする入試制度（知識の量を問う）による正解主義が知識観の転換を阻んでいるように感じました。なかなか超えられない一斉授業の壁はこうした知識観の厚い壁が当たり前のように（隠れたカリキュラム）として存在する。これを崩すためにも、アメリカ並みの入試制度へ大転換が必要に感じます。

きっと、教室の先生方も、斎藤喜博、板倉聖宣、有田和正の３名の授業実践をリアルに見ることができれば、目指す授業像が持てるのではないかと感じました。副島先生が最後に言われた「教師は学校内で学んでいるだけでは十分学ぶことができない。先生方は学校外で困っていることを共有できる場とつながりが大切である」との言葉に多くを学ばせていただきました。

今日の講座で学んだ中で重要だと思ったことは、深い学びにおける知識です。

これまで知識というと、決められた語句の意味を理解し覚えておくべきものとか、テストや質問に対し分かりやすく説明できるものと思っていました。よって、きちんと説明できなくては知識とは言えないという概念を持っていました。実際、そういう授業を目指してきたように思います。しかし、お話しの中で、知識は与えられたものではなく、自他との深い学びの中で、新たに生まれるもの、再構成される、生きて働くものということを学びました。そこに、授業の意味があることを改めて気付くことが出来ました。知識をそのように考えると、デザインは「状況との対話」から生まれるとか、今、考えたこと、聴いて考えたことで生まれる「探索的会話」や「援助要請」の意味や大切さがストンと落ちました。教師主導の知識伝達型授業が岩盤のようにある自分にとって、授業をデザインする上で重要な、心がけるべきことを学ばせていただきました。ありがとうございました。